

平成23年度 第3回 CCC 芸術系グループ運営委員会 議事概要

- I. 日時 : 平成24年2月29日(土曜日) 午前10時～午後4時
- II. 場所 : 私立大学情報教育 事務局 会議室
- III. 出席者: 有馬委員、西垣委員 スカイプ参加(久原委員、小川委員、宮田委員)
(事務局) 井端事務局長、森下主幹、松本職員

IV. 議事概要

1. 学士力の実現に求められる教育改善モデルの完成

2月10日に打ち合わせ会を実施し、その結果を踏まえて、「美術・デザイン学教育における教育改善モデル(中間まとめ案)1、2」について、アンケート結果を踏まえた見直し、修正を行った。

アンケート回答について、主な検討、修正は以下の通りである。

(1) 教育改善モデル1

- ① 中間まとめ案1、2とも具体性にかけている。
 - ・2.4 ICTを用いた学習内容・方法に具体性を持たせて修正する。
- ② 学部レベルで自らの判断でデザインの制作をするのは非常に困難である。
 - ・あくまで授業の中でのデザインの制作を前提に考えている。
- ③ ICTにこだわり過ぎではないか。人間関係や対人情報交流も大事である。
 - ・対面の授業が前提でICTはこれを補完する考え、誤解をまねく表現は修正する。
- ④ 造形には視覚だけではなく触視的なもの、聴覚的なものもある。視覚表現でなく造形表現にすべき。
 - ・視覚表現でなく造形表現に修正する。
- ⑤ 授業のねらい、授業の仕組み、ICTを用いた授業シナリオ、学習内容・方法の具体性と整合性が無い、多面的な視野の育成など新しい教育方法が不足について
 - ・2.4 ICTを用いた学習内容・方法に具体性を持たせて修正する。

アンケートの意見を踏まえ以下のように全面的な検討と修正を行ない、授業の点検・評価・改善の視点を検討し以下のように改訂した。

美術・デザインにおける教育改善モデル(中間まとめ案1) 委員会で改訂(2012.02.29)

(青字の部分は改訂した部分)

本協会が策定した三つの到達目標の内、「2. 感受性に富み、創作や鑑賞を通じて**造形表現**が理解できる」を実現するための教育改善モデルを提案します。

【本協会が策定した美術・デザイン**における学士力の到達目標】**

1. 社会、歴史、自然、人間などの観点から造形表現を理解できる。
2. 感受性に富み、創作や鑑賞を通じて造形表現が理解できる。
3. 美術・デザイン系分野における専門の理論と技術を統合し、社会貢献に寄与できる。

1. 到達度として学生が身につける能力

- ① 作品を様々な自然・社会現象と関連付けることにより、芸術性を理解することができる。
- ② 作品の表現法を分析することにより、素材・メディア等の性質やその構成方法を理解し、表現に活用することができる。
- ③ 多面的な視点を取り入れて、より広い視野から表現することにより、多くの人にとって意味のある創作をすることができる。

2. 授業デザイン

2.1 授業のねらい

作品が個人的視野にとどまり、多くの人々に理解されない創作が少なからずあることで、社会の期待に十分応えられていない。国際社会に通用する創作者を育成するための幅広い多面的な学びを工夫する必要がある。

この授業モデルでは、歴史、社会、自然、人間などの観点から作品のコンセプトについて、学生や社会からの意見を取り入れ、創作できることを目指す。

2.2 授業の仕組み

この授業を進めるにあたっては、到達目標1の「歴史、社会、自然、人間などの観点から造形表現を理解できる」ことが修得されていることを前提としている。到達していない場合には、学習管理システムにおいて、学生の能力に応じたeラーニングを行う。

多くの感性から学ぶために、多面的な視点で創作や鑑賞ができるよう、美術・デザインに加えて他分野の教員と協働するためのプラットフォームを構築しておく。その上で、授業時間外でも学びを可能にする学習の仕組みや支援体制を構築する。

2.3 授業に ICT を活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。

- ① 多くの優れた作品に接する中で自然・社会現象と関連付けさせて、芸術性を確認させる。
- ② 提示した制作課題に対し、調査・分析し、作品のコンセプトを追及させ、制作させる。
- ③ 制作した作品をアーカイブすることで相互評価を行い、作品表現の多様性を認識させる。

- ④ アーカイブした作品について他分野からの多様な意見を踏まえて、振り返りを行う。
- ⑤ 作品をネットワーク上で発表し、大学間、社会からの意見を取り入れて学びを発展させる。

2.4 授業に ICT を活用した学習内容・方法

以下に学習内容・方法の一例を紹介する。

- ① 美術館、博物館、資料館等の学外研修やデジタルアーカイブ等から多くの優れた作品に接する機会をつくる。
- ② 制作課題の過程でファシリテーターを導入し、チュートリアル学習を行う。
- ③ 制作した作品をネットワーク上にアーカイブし、学内外との意見交換を行い、異なる視点から振り返りを行わせ、その上で相互評価を行う。
- ④ 連携のプラットフォームを通じて他分野の専門家や社会からの意見を受け、見直しを行い、発展的な学びを展開させる。

2.5 授業に ICT を活用して期待される効果

- ① 制作過程を自己確認できることから、振り返り学習と客観的な自己評価ができる。
- ② 作品制作のプロセスを可視化することで、多様性を理解し他の感性から学ぶことができる。
- ③ 他分野の専門家から作品の意見を受けることで様々な現象の中に潜在する芸術性を理解することができる。
- ④ ネットワーク上に作品を公開し、第三者の意見を得ることで、発展的な学びができる。

2.6 授業に ICT を用いた学習環境

- ① 他分野の教員とコンソーシアムを形成して協働するための教育クラウドの整備が必要になる。
- ② チュートリアル型の学習支援を行うファシリテーターを導入することが必要になる。
- ③ 学外や学内他科に情報を公開し、意見を求めるための環境が必要になる。

3. 授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価・改善は、他分野の教員による意見、学生の相互評価、社会からの意見をもって、制作内容の振り返りと発展的な学びができたかの検証を視点とする。その際、ICTを用いて一定の期間、作品をネットワーク上に公開して意見を求める。その結果を参考に、複数の教員で意見交換を行う場を設け、振り返りの仕組みを改善する。

4. 授業運営上の問題及び課題

- ① 教員間でコンソーシアムを形成して協働するため、他大学や第三者との連携の仕組みを構築する必要がある。
- ② 対話型チュートリアル学習を行うファシリテーターの育成と確保が必要となる。
- ③ ネットワークでデジタル化した作品を公表するための著作権管理の仕組みが必要となる。

(2) 教育改善モデル2

① 中間まとめ案1、2とも具体性にかけているとの指摘を受け、2.4 ICT を用いた学習内容・方法に具体性を持たせて修正を行い、授業の点検・評価・改善の視点を検討し以下のように改訂した。

【本協会が策定した美術・デザインにおける学士力の到達目標】委員会で改訂(2012. 02. 29)
(青字の部分は改訂した部分)

1. 社会、歴史、自然、人間などの観点から造形表現を理解できる。
2. 感受性に富み、創作や鑑賞を通じて造形表現が理解できる。 に修正

3 授業に ICT を活用したシナリオ

以下に授業シナリオの一例を紹介する。に修正

2.4 授業に ICT を活用した学習内容・方法

以下に学習内容・方法の一例を紹介する。に修正

- ① 作品の相互評価や制作過程のリフレクションをネットワーク上で共有し、相互評価を行い、視点と表現の多様性を認識するとともに、客観的な視点で振り返りを行い、制作の方向性を明確にする。
- ② 大学混合チームでネットワークを用いて協働での制作を進め、それぞれの持ち味や役割を発見しながら視野を広げていく。その際、学習に有用な資料を Web 上で共有し、データベース化する。
- ③ 異分野間で意味を共有できる幅広いテーマを設定し、オンラインでプロセスを共有しながら大学間の混合チームで制作を進める。
例えば、異分野の大学間でのコラボレーション。小学生向けの教材制作を教育系学生がコンテンツ、デザイン系学生がインターフェイスデザイン、情報系学生がプログラミングを担当して行う。ボストン、香港、日本の小学校教員と大学生が連携し、小学生の国際コラボレーションによるアニメーション制作を行った等。
- ④ 社会との関わりの中で制作活動を体験させ、培った知識と能力を再認識させる。その上で美術・デザインの役割や期待を理解させ、社会や市民生活の改善や発展に関与することを意識させる。

例えば、地元信用金庫の紹介による中小企業・商店等の Web ページデザインに学生がグループワークで取り組み、地域との連携を行う等。

2.6 授業に ICT を用いた学習環境

- ① 異分野、他大学、地域社会等との間でコンソーシアムを形成して協働するための教育クラウドの整備が必要になる。
- ② 対話やネットでチュートリアル型の学習支援を行う上級学年生によるファシリテーターの導入が必要になる。
- ③ 学外や学内他科に情報を公開し、意見を求めるための環境が必要になる。

3. 授業の点検・評価・改善

この授業の点検・評価・改善は、教員による意見・助言、学生の相互評価、及び異分野、他大学、地域社会等からの意見・助言をもって、発展的な学びができたかの検証を視点とする。その際、ICTを用いて一定の期間、作品をネットワーク上に公開して意見を求め、その結果を参考に、意見交換を行う。

V、次回日程と内容について

本日の改訂（案）を今後検討し、平成 24 年秋までに完成させる。また、24 年度はこの教育改善モデルを実現するために必要な教育力についても検討を行う。

次回日程は新年度に再度メールで調整する。